



TITLE:

雑報

AUTHOR(S):

CITATION:

雑報. 地球 1936, 25(5): 390-398

ISSUE DATE:

1936-05-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184554>

RIGHT:

附近の四軒を合して八十錢といふ發售である、各篇適當なコースをとつて横斷・縦走いろ／＼のコースと、それに近い名所舊蹟を網羅してある、六甲山の遊覽・妙見・藤尾甲山等神戸の附近から大阪は河内・高野・和泉にわたり奈良から京都いづれも名所舊蹟ばかりでない。従つて新しいコースに新鮮な景觀を味はんとする人々にとつては望外の寶典たるに恥ぢないであらう。たゞ印刷がやゝ野暮くさい、すつきりしないといふ批難があるかもしれないが、むしろ素朴の氣味があるとして、推賞しておくべきであらう。中學校や女學校のハイキングに早速間に合ふやうにしてあるのがうれしい。

(藤川)

雑 報

○和歌山三重兩縣各地に於ける南河内地震の震度

昭和一年二月二十一日の南河内方面の地震の震度を震央より隔遠の地方で調べて見た。尤も旅行は他に要件があつたので、震度のみを十分には調査することを得なかつたが、大體の調査によつて、特殊な地方に震度の大なる地であつたことを明白にするを得た。

五條 奈良縣下であるが序に記す。時計は止りし處多し。音二回あり、驚きて空を仰ぐ間に搖れ初む。音響は北より來る。棚の物品中南向のものよく落つ、東西向のもの落ちず。

壁は南北に面するものに龜裂多く、東又は西に倒れしものあり。井水濁れるものあり、特に西岡方面の病院の附近よく濁る。小形の墓碑倒れ、大形のものは左旋、四脚臺ある碑は脚折れしものあり、燈籠よく倒る。石碑は南に移動せるものあり、土塀は龜裂せしものあり、その瓦屋根は波狀に曲り、一部崩るゝものあり。屋根瓦は少しく落ちたる處あり、北方の牧野村大澤に龜裂、西久留野・上之に龜裂、上之には巾一握長三〇米、上垣内には巾五握長一〇米の南北に走る龜裂生ぜり。

橋 本 音響は北より來り、後振動、壁は隙を生ず。石碑よりも石燈籠倒れたり。屋根瓦少々落つ。

高野口 橋本よりも屋根瓦の落ちたるもの多し。

名 手 古土塀の瓦落ちたるものあり。多くは時計止まらず、止りたるは一部に過ぎず。

星 屋 時計止りし家(東向の時計)あり。屋根瓦の被害全くなし。紀ノ川谷にては五條の震動最も強かりし模様に聞けりと語るものあり。

和歌山驛 被害なし。

田 邊 省線紀勢西線田邊驛附近は時計止りし家多し。震動暫くにして止む。

白濱温泉 白濱錦城館の臺所の時計は止まる。他は止まらざりき。浴客中には地震を知らざりし者あり。

勝 浦 電燈コード甚しくゆれる。時計止る。他に被害な

し。

新宮 古家室みしものありといふ(不確實)。浮島方面は時計全部止る。棚の物品落下す。其の當日の夜は電燈一時點燈せず。成川は新宮の東にして時計止まらず。地鳴を聞かず。

音川 熊野川中流、九重村にあり。小學校の時計は止まりたるも他は止まらず。松澤炭坑々内にありし坑夫は震動と音のため、坑外に出んかと考へたり。暫くにて止む。

神下・田戸 瀨八町、北山川の北岸、奈良縣に屬す。瀨ホテルは東向時計止まらず。北向時計止まり、修繕にかゝらぬ位大破せり。地鳴か山鳴か區別つかざるもモーターの如き音せり。後に震動を感じず。音は南より來りしが如く思はる。大正一二年の東京地震の際より弱く、濃尾地震の際は更に強く石垣崩れて人死せり。附近には地震後雄啼かざれば尙、揺れるといふが、二月二日地震後には雄啼けるを以て安堵せり。北山川の上流より筏を流し來る人は中途地鳴を聞きしも、地震なりしといふことは、瀨八丁に來りて知れり。

小川口 棚にありし「ざる」の落ちし家あり、畑の茶の木波打ちて揺れたり。西方二軒の大嶮嶺山の坑内にては南より自動車來るが如き音を感じり。東方の小栗須にある小學校の瓦屋根の瓦は修理を要する程度に破損せる處あり。

尾呂志 交番所を訪へば當時選舉開票のため巡査は出張中にて尾呂志村の震度明かならず、と言へり。被害無。時計止

まりしものあるを聞かぬ。

阿田和 全部時計止まる。桶の水盛んに揺れて溢出、屋根瓦の破れたるありて修繕せり。家の中に残り居りしものなく何れも戸外に出る。棚の物品落ちしものあり。

木ノ本 選舉投票箱保管中の村長巡查等思はず戸外に出で投票箱のみ暫く残こされたり。全部戸外に避難時計全部止まる。家屋の屋根瓦動きし家あり、棚の物品落ちず。

尾鷲驛 時計止まりし家殆無。音を聞かず、水平に揺れ、水は溢出せず。

相河口 時計止まらず。

高茶屋・津 西より大風の如き音きこゆ。時計止まらず。棚のものは落ちず。土藏の中に居りし人は地震を知らず。この附近には地震の強かりしといふ處、別に聞かずといふ。

龜山驛 時計は大分止まりしものあり。水は盛んに溢出、地鳴なし、戸外に出ざる者もあり。自轉車にて走りし者に地震を知らぬ者あり。古家に屋根小口の瓦の破損せるもの一二ある様子。

川東 阿山郡壬生野村、時計は南又は北向止まる。屋根瓦の動けるものあり、水溢出す。音響は知らず。屋内に居りし者なし。大正一二年の關東震災程度と思はると。

東村 新居村東村、古屋一棟倒れたり。壁の少々落ちたる家あり。東村は安政地震の際に被害顯著であつた部落である。

波野田 震度弱かりしが如く何等被害なし。岩磐上にありといふ。

以上各地の震度を概括せば紀ノ川谷にては五條附近、紀伊半島沿岸にては新宮より木ノ本間、特に阿田和附近、山地にては小川口の東、小栗須附近に震度大であつたことを確めた伊勢の北部に於ては龜山より西、主として關西線に沿ふ地方に稍々震動が大であつたことは明白である。(上治寅次郎報)

○紀州熊野地方山村の民家

紀州熊野地方山地の民家は一般に低い平屋造が多く、二階造は其の數甚だ少ない。民家で最も眼につくのは屋根の葺き出しが長く、従つて家の本建の面積に比し、屋根の面積が甚だ廣く、極端に言へば本建の上に傘を擴げた如き感がある。家には土の壁が極めて稀れで多くは板の壁である。屋根には杉皮をのせ、之を木材を以て押さへ、更に人頭大以上の岩塊を載せてあるもの多く、瓦葺は稀である。この關係上屋根の傾斜は緩い。特に著しきは屋根の周圍から板圍ひを下げ、恰も幕を張つた如き體裁をなし、この板圍ひは妻の方は二米以上も屋根より下り、他は○三—○五米位下つてゐるものもある。甚しきは妻の方は屋根より地面迄達するものもあつて、恰も家を板の幕を以て覆つた如き觀を呈するものもある。この板圍を「ガンギ」と呼ぶ。この種の民家は熊野川・北山川の流域に最も多く見らる。

ガンギ造の民家は伊勢の山中にも屢々之を見、更に、伊賀

の北より草津線にて北行せば栢植驛の北方附近の部落に散見するが、僅に妻の部のみに止まり、ガンギの長さも○四—○五米以内程度に短くなつて居り、草津邊では見えない。その代りに幅○四米内外の厚板を横にし、屋根に沿ひて張つて裝飾としてある。

熊野地方の民家に板壁を多く用ふるは木材の豊富なることも一因である。又、多雨にて、且つ溫暖なることも原因であると思ふ。この種の民家が地方的に變化しつゝ伊勢・伊賀の北方より近江に及ぶことは注意すべく、近江では家の裝飾に用ひられて居る様である。熊野地方でも裝飾の意味もあるらしく、特にガンギ用板は心材の厚味を選び、體裁を重んずる風もあるといふ。熊野地方の在來の民家の低きは暴風を避ける理由もあらむか。(上治寅次郎報)

○ブラジルでの採油植物

野生ゴムで世界を風靡したブラジルには猶多くの野生採油植物があつて一九三五年には一億四千二百萬キロ、六千七百萬ミルレスの多産をしめしたその特異なるのは、第一にカルナウーバ臘である。棕櫚科のカルナウベラといふ木の十六米程の垂直な幹の上部に葉が出る。幹は建築材であり新芽は食用となり、果實も美しい。其核から油をとるが油は蠟で葉につく、葉の白い蠟を集め約二十分煮ると黄色の蠟ができる。蓄音機のレコード・電氣絶緣床・ボマード原料・漆具材料・製紙材料などになつて、我國へも、獨逸・北米から轉輸入されてゐる。

第二にパウ・ローザ、樟科の木で材を蒸溜して香料をとる、ローザ精油で、テレピンに似た油である。

第三、ニヤムイーはネグロ河の下流、アマゾン流域の河地に出来る樟科で幹に孔をあけて樹油をとる、テレピンであつて、土人は燈火に供してゐる。

第四、バラー栗・アマゾン平原のブラジル・ナツトといふ略々椰子の實に似た外皮の中に二十個内外の種子がある。種子の皮は堅、中に清澄な油がある。胡桃のやうに食用ともする。油脂は高級石鹼となる。一九三〇年に二千五百萬キロを輸出した。菓子の原料ともなつてゐる。

第五、ウクウーバ蠟、白と赤との二種あり白は肉荳蔻科の海岸森林中にある木の實で、後者はアマゾン下流の高地に野生する。一本の木から六〇乃至九〇リットルの種子がとれ、土人は之を蠟燭に代用する、ステアリンの原料とする。

第六、ココ・ダ・パイア、赤道以南の海岸一帯に産し棕櫚科である。普通ココナツトといはれ人頭大の軟肉果を生ずる。

白色多肉の種子をもち其内部は空洞でココの水を含む。但し外皮は頗る厚くして堅い、内皮は骨質緻密で種子を包むがその主要なのは種子の中の胚乳であつて、コブラと稱し、取引される。油を抽出する原料である。但しこれは南洋でも産出する。

第七、クマルー、荳科で種子は外氣にふれると直ぐ變化する。芳香の強い黄色の油を三〇%も含む、高級石鹼となり香

料ともなる。アマゾンから東北伯に野生する。

第八、コバイーバ樹脂、白檀油であつて、樹幹から出る樹油そのまゝに薬用とする。南阿・コンゴーをはじめ、コロンビア・ペルー等の熱帯にも出来る。ブラジルの北及び東北地方に野生する。その老樹一米以上の幹（三十米の巨木）を撰び八・九・十月の間に、地上二米邊のところに樹心に達する穴を斜に通して油を採る。その穴から平均二リットル内外をとる一年一本二十リットルを限度とし穴を木栓でふさぎ翌年になつてまた採油する。この樹油は收斂性を有し、強力な防毒劑で、服薬すれば消化及び排泄系統内の諸粘膜に對し、收斂・殺菌・癒創の功があり、内服淋病治劑として有名である。

第九、ババツスー椰子、ブラジルの大棕櫚で、アマゾン河サンフランシスコ河流域に野生しマラニョン州の北西部にも多い。河畔の低地よりもやゝ高臺地に生じ樹齡二百年にも達する。十年位のも硬い實が出来る。七月から十月までの間に熟して落ちる、一枝に數百のレモン位の果實が珠數なりにつき、一本から數枝を落とす。その實の殻が堅いのでこまるとが、最近之を碎く器械が出来た。その中の實は琥珀色で六八%の油をもつ、この果實千七百キログ、石炭一千キログの火力をもつので大戦中から利用され、今では人造バター・化粧品などに用ひられ、ディゼル機關の燃料として重用するゝに至つた。石油又は重油以上だといふ。

残滓は家畜の飼料となり、残殻は燃料となり、コークスに

なる。幹は建築材であり芽は食へる。障害はこの實を奥地から運搬することにかゝつてゐる。

第十、ムルムルー、この木もやはり棕榈科で、果實は鶏卵大である。革質の果皮の下に油分にとめる黄色の果肉がある人造バタの原料で二月から九月に收穫する。

第十一、唐胡麻、マモーナといひ大戟科でヒマシ油がとれる播殖が強いからアンチール群島では雜草として排斥される。ブラジルでも地方によつては害草であるが、サンパウロ州では栽培してゐる。ヒマシ油は現今たゞ下劑として用ひられる外に滑油として高級品である航空機にはこれではなくてはならない。又石鹼とか消毒液とか香料にも供される。

猶この外に棉質油と落花生油とがある。近年我國へは一年二千五百萬圓以上の採油原料の輸入がある。直接ブラジルから輸入される時機も遠い將來ではないであらう。

○大石橋附近のマグネサイト

滿洲の鐵鑛は大きいが昭和八年四十三萬トンで世界總產額九千萬トンに比べては○・五%にも達しない、石炭でも千萬トンに達したが世界全產額十一億五千萬トンに比して一%にとゞかぬ微々たるものであるが、獨り菱苦土鑛は昭和九年六萬五千トン、世界推定產額六十五萬トンに比して一○%に上つて有力である。しかも總產額六十億噸であるから、有名なタスマニアを凌ぎ世界第一といはれる。大石橋附近の菱苦土鑛は原生代の片麻岩の中にあつて大連附近から安奉沿線・熱河省南方に出てゐる有用鑛

物に富む地層中のもの、たとへば鞍山の鐵鑛・大連附近のドロマイト、又は大石橋附近の滑石などすべて同じ地質時代の岩層に含まれてゐる、さうして大石橋附近に散在せる菱苦土鑛は五十餘區の廣い鑛區に出るもので、マグネサイトと同時に日本にないドロマイトも出る。

マグネサイトは一見大理石の如き淡白色の鑛石であるが、中には淡黒・淡紅のものもあつてマグネシアが四四―四五%、石灰が一〇―一二%で硅酸は僅に一―四%其他四五―三五%である。これを八百度乃至千度に焼くと白色の輕燒マグネシアが出来る、之を粉にするとマグネシア・セメントで鋸屑や苦汁其他を混和して床張に適し、色をつけて塗料・人造石・タイル及苦土磁器にする。

もし之を千三百度の高熱でやくと中燒^{チウヤキ}マグネシアといふものになつて硫酸マグネシア・炭酸マグネシアの藥品原料となり、このまゝで下劑ともなり、人絹の漂白劑として不可缺のものになる、昔は苦汁から藥品として採取したが、今日では専らこの中燒からとる、同時に齒磨粉及びゴムにも用ひ、多くの金屬合金の原料となり、就中之とアルミとの合金ジュラルミンは飛行機などに必要な輕金屬で、日滿工業の進展に伴ひ有望となつた、更らに之を千八百度乃至二千度の高熱でやくと硬燒^{カウヤキ}マグネシアといふ、これは耐火材料として貴重なもので、硬燒マグネシアでつくつた耐火煉瓦は二千四百度以上の高熱に耐えるから、製鋼・平爐の製造用、電氣爐の内張に

使用される、耐火煉瓦は硬燒マグネシアを粉碎し共に酸化鐵其他結合劑と水を加へ煉り固め、型にいれて壓縮形成、十日乃至十四日間乾かして更に之をやくものである、いづれにしてもマグネシアの利用は廣い。

過去に於ては日本から製鐵業其他の催少な需用で產出も少かつた、昭和元年礦石（マグネサイト）二〇、〇〇〇噸にすぎなかつたが昭和九年六四、二七〇噸に上つた、すべて軟中、硬三種の燒成品即ちマグネシアとして移出され製鐵製鋼場に送られた。その運送はすべて管口經由である、これは大連經由よりも一貨車で六十圓ほど安値になるからである、所が最近になつて獨逸や西班牙から五百噸前後の原鐵の注文があつて管口在住英人の手で、歐洲への輸出が見られるやうになつたから、この鐵石の將來は刮目すべきものとなるであらう。

○滿洲の油房工業

滿洲の油房は百年來の歴史を有し日露戰爭後、歐米へ豆油を輸出するに至つて一新紀元を劃し日本への豆粕も多く入つたが、最近日本の化學肥料殊に硫酸のために壓迫され歐洲榨油工業の勃興によつて豆油輸出不振といふので、今日では油房は行きつまつてきた、その原因はあまり他國依存である際に、世界の鎖國的自給自足經濟によつて他國品を排斥した結果であるが、その結果昭和七年迄は全滿の豆粕年產六千萬枚前後であつたものが、八年には三千萬枚に減じ、大連油房はその五〇%をしめ、残りの五〇%を

全滿に分つたといふ次第で、嘗ては大連油房と覇を爭ひ、大正八・九年に工場數四十二、豆粕生産二千萬枚にも達したハルビンも今は僅に全滿の一割にすぎず、新京は僅に二%を産するに止まり、新京とハルビンの油房は非常な打撃をうくるに至つてゐる。ハルビンでは現在操業中のもの十一工場にすぎず慘憺たる有様で、新京の方は京圖線が裏日本への開通もあつてやゝ見直され昭和九年八十三萬枚を産したが、これは昭和五年の產額指數を百として二〇といふ激減ぶりである。

かくて自由通商時代が再來せざる限り新京・ハルビン其他滿洲油房は重大危機に直面しうである。そこで大豆油を精製加工して硬化油・石鹼・塗料・蠟燭等の工業に轉換する方策が考へられてゐるが、それもオイソレと直ちに出来るわけではない。

故に滿洲國政府は大豆の生産過剩救済のために麥作其他への轉向を奨励しやうと動きかけたのも理由がある、今日となつては豆粕を海外市場にのみ依存せしめず、滿洲農民をして豆粕使用になれしめ他作物の増收を謀るやうにすれば、一面油房の救となつて一石二鳥の方法らしく觀られる。

○暹羅國對日貿易

一九三四年四月から一九三五年三月までのシャムの外國貿易は輸入一億百七十萬銖に達し、輸出は一億七千三百萬銖でいづれも前年より増加した、輸入の首位は日本で第一位、二千百萬銖、シンガポール・ホンコン・蘭領東印度・英國これについて各一千萬銖以上である、この中

香港・新嘉坡は中繼貿易が多い、香港からは支那・日本の商品が多く、シンガポール・ピナンから英國の品物が入る。

輸出は米によつて増減する、米・木材・錫・ゴム・コブラ等の原料國でシンガポール・ホンコン・ピナン・印度等が上位をしめ、日本は第十四位、九十萬鎊にすぎなかつた。勿論一昨年は日本へ米が輸出されたので第七位になつた、但し輸入で新嘉坡や香港のもの、臺灣・朝鮮のものを加へると全輸入の二割五分にも達する見込であるが、我國よりの輸入品の重なるのは、

ビール・銅鋸詰・トタン板・鐵線と其製品・釘・自轉車及其部分品・人絹・綿糸・綿反物等で粗製品であつたが、近頃は精製品も増加し、ボイル・ホプリン・ドリル等をはじめ金屬製品も多く自動車用品・其部分品・印刷用紙・ゴム製品・煉乳等が増加してきた。食料品では銅鋸詰の外、砂糖・茶・乾菜・果實・調味料・魚があり、セメント・刷毛・タイヤ・チニープ・セルロイド・化學製品・陶磁器・時計・裝身具・染料・電氣用品・ガラス類・ラムプ・メリヤス・マツチ・貴座・アルミニウム製品・其他鐵道用品や樂器・寫眞材料等に及びあらゆる織物類に及んで前途は有望である、英米の高級品が入つてくるのを競争しうるやうにしなければならぬ、日本への輸出の著しく少いのは米が買はれなかつた結果であるが、米が輸入されると輸出額は一度に五・六倍の額になるであらう、本年度パンコックへ入港した外國船舶千四百四十五隻百五

十萬トンに上つた中で日本の船四十八隻十二萬四千トンにすぎなかつた。

○青島の本邦人紡績

在青島の邦人紡績工場は、四方街にある内外綿・日本紡・日清紡の三廠と滄口にある鐘紡上海絹紡・長崎紡・富士瓦斯紡の三廠と四滄路にある上海紡と豐田紡の二廠合計八社の經營で最後の二者は昭和十年の創立であり、目下建設工事中のものに同興紡績がある、邦人事務員百六十人、華人二一四人、邦人工男三四人・女一五人、華工男一二・七二二人・女一〇・一五八合計二萬二千餘の華工を役し四十八萬五千六百鍾織機七千一百十四臺を運轉する。

之に對する中國人の經營は四萬八千鍾七百十臺で、いづれも邦人側の十分に過ぎない。

滿洲事變前迄は當地產縮絲布多量に滿洲へ出たが事變後日本内地製がこれに代り、山東省奥地では排日氣風猶止まず、財界不況で農民の購買力減少のため賣行一時不振であつた。

山東では勞銀と石炭動力が低廉であり、山東棉が出来るために企業經濟の上からは有望であるが、高率關稅のために、外國の縮絲布とは競争にならないで、却つて青島から輸出さへ出来るやうになつたが、支那内地へ賣る段となると華人の紡績は自國產といふので鐵道の運賃をやすくしたり、捐稅や統稅を緩くするとか、民衆を使喚して邦品排斥をやるなどの手を出すから、自然邦人製品は賣りにくい。

しかし華紡は器械もわるいし、經營不良で、生産費が邦品

の二倍高になるからこれらの壓迫に屈從して猶且つ本邦品は進出する可能性がある、この點に於て青島の邦人紡績は前途を樂觀してゐるやうである。

○ニュージールランドと日本

新西蘭は面積十萬平方哩、人口百五十五萬二千人、内英人の子孫九四%、残りの六%はマオリ人で其數僅に七萬四千人、しかし國民の生活程度が高い、恐慌前輸出十一億圓輸入九億圓、一九三四年五億八千萬圓の輸出に對し、四億二千萬圓の輸入があつて極めて健全な國である、その輸出の八割乃至九割は肉類であるが、英本國がこれに課税せんとするに至つて新西蘭は東洋市場を注目はじめた、

日本との貿易は輸出入額二千萬圓、出入平均であるから片貿易でない都合がよい、しかし同國貿易額の二%七だからまだ進歩が出来る、羊毛買付けをして輸出を多くするのが得策である、現在英本國が第一位の輸出入國で、輸出八三%輸入五〇%である、日本は輸出第八位、輸入六位で、輸出品はバター・ラム・羊毛・チーズ・マutton・牛肉・ペルツ・ソーセージ・林檎・皮革・タロー・木材、主として羊毛・肉類の國である、輸入は全製品六三%、食料品一三%、原料品三%六であるから工業國でない消費國である。日本の事情がわからないし、日本が羊毛をどう消費してゐるかもしれないとふ鹽梅である、綿布や着物や電氣・自動車等は將來賣込が出来るから、あちらの品物特に羊毛を買付けるやうにしたい。

邦品の不良な廉價品は、新西蘭に向かない、生活が高いからである、オークランド二十二萬、ウェリントン十五萬、クライストチャーチ十三萬、ゲニデン九萬人といふ四つの小都市が可成り遠く分散してゐるから取引が小規模であるけれども、大阪商船と山下汽船の直接交通が愈々昨年から實施されたので、將來の發展が出来るらしい、總領事館など今日まではシドニーの兼任であつたが、海上千二百哩をへだて、兼任など出来るわけではない、ニュージールランドの訪日使節もやつてくれば、こちらからも訪問してまず、兩國の貿易の發展が望ましい。

滿洲京白線と洮索溫線

新京から農安、扶餘、大賚をへて白城子、即ち洮安に達し、洮安から更に索倫を過ぎて興安嶺を横斷して溫泉南に達する鐵道が出来た、この線はやがて興安北省の滿洲里もしくは貝爾湖へ出てゆく新京から東羅津に通ずる線によつて、滿洲橫斷の一大幹線となる運命をもつもので、所謂故の東支鐵道の並行線であり、對露對蒙の重要線となるであらう。

昭和十年十一月一日から京白全線開道した。農安、扶餘（こゝは高麗や百濟と同族の穢貊の最古の根據地である）大賚、洮安の四縣は七十八反响（一响は七反五畝にあたる）の廣大な農地で大豆二百八十萬石（一石は日本の一石六斗）の外小豆、吉豆、高粱、粟等を産する、將來は農業開發地である、汽車所要時間十一時間。

全年全月全日から白城子から索倫まで七時間の旅程でもとは大連や奉天又は四平街への南下貨物の背後地であつたが將來はどうなるかわからぬ。

勿論四平街へ南下する方が距離は短かい、沿線に王爺廟がある、周圍土壁で町の三方は丘陵で人口約一萬、日本人三六六人、王爺廟のつぎは索倫であるが興安東省シチヤカル旗の東南端で洮兒河が流れ、この河に紅鱒も上る清流である。人口三千内外で清潔な町であるが、滿洲の田舎である、こゝから更に山岳地帯を北に走つて溫泉廟に通ずる、興安嶺の森林地帯で十一月十日に嶺の南麓七道溝までついた。ここからトンネルで興安嶺を貫通する昭和十二年完成の豫定で、七道溝には千餘名のトンネル工事關係者が住んでゐる。たゞしこゝから興安嶺を越える國道は約二哩、十年八月に完成してゐる嶺を越えると溫泉廟、連絡トラツクがある。蒙古名を哈倫^{ハレン}阿爾喜^{アルチ}といふ。その溫泉は萬病治療の靈泉であつてアルチ河の右岸に東西約百五十米、南北四十米の木柵をめぐらした中に二十數個の花崗岩の浴槽がある。露天の浴場で溫度は攝氏四十度前後だから溫泉の名がある。花崗岩の浴槽は支那の皇帝の寄贈にかゝるといふ。ホロンバイルの蒙古人は三月頃か

らこゝへきてあまりあつくはない冷水浴槽につかる。浴槽外の石垣には蛇が居る。中には小さな魚が黒くなる程ある。いづれも神の使であるとして神聖視され入湯に先立つて必ず餌を與へる習慣がある。

冷水浴槽には先づ二十一回つかつて身體を訓練し、それから喇嘛僧の指示により適當な溫浴槽に入ることになつてゐる五月以後は蒙古黨が増加し、ハイラルの露人もきて、二千人からの浴客となるが秋風が訪れると引揚げる。民國十六年三萬元で十五棟四四五坪のバンガローが出来、客室百五十を設けて露人入湯の便をはかつた。將來滿鐵、陸軍、滿洲國方面の手でこゝは立派な溫泉療養地となるであらう。

溫泉廟からさきは鐵道の延長は易々たるものだから、この線がどうした運命をもつかは興味をもたれる。(藤)

○日本古生物學會例會講演會開催

昨年創設された古生物學會の第三回例會は來ル六月十三日(土曜)午後一時から京都帝國大學理學部地質學鑛物學教室にて開催され多數の古生物學及地質層序學に關する講演ある筈にて一般好學の士の來聽を希望することである。講演の題目等につきては間にあへば六月號に掲載するであらう。